

美術随想 (12)

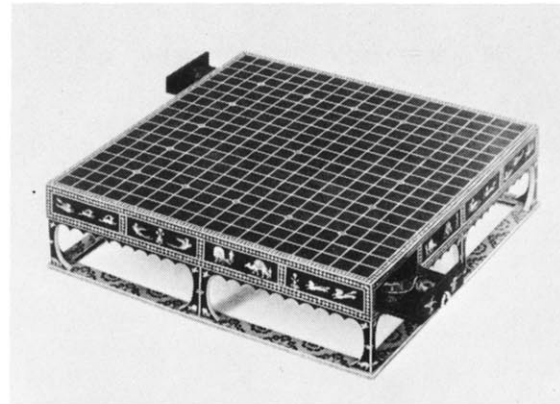
特別展について (その2)

大和文華館々長 石澤 正 男

博物館主催の展覧会が大評判となり、連日大群衆が殺到した例は戦前にもありました。その代表的な例は紀元2600年(西紀1940年)奉祝記念として開催された皇室博物館主催の正倉院御物展であります。この展覧は今の東京国立博物館本館の二階全部(特別室を除く)を会場に使用しましたが、20日間の短期間に約70万人の観覧者が入館しました。即ち一日平均約3万5千人の入館者があったことにより、入館券を売る出札所の混雑は非常なもので、順番を待つ人々の行列は広い博物館の敷地を一周した上、さらに上野公園を縦断して山下にまで続く日が度々ありました。正に延々長蛇の列で、恐らく前代未聞のことといっても少しも誇張ではありませんでした。観覧券を手にした人々は先を争って正面玄関に駆け込むので、あとでは一回の入館者の数を制限しましたが、それでも長い間行列させられて、漸く観覧券を手にした人々は一刻も早く陳列場に駆けつけようとして監視の制止など耳に入らぬらしく、一散に駆け込む光景は跡を絶ちませんでした。

陳列室内の混雑は、これまた全く凄じいもので、「酉の市」の雑踏も顔負けの状態でした。普段は立派な新装の事務室(今の本館は昭和12年秋竣工)で仕事をしている

鑑査官以下全員総出で、大声を張りあげて、観覧者の整理に当たっていました。この時の話は今では古老の語草となってしまいましたが、なぜこんな大群衆が3時間以上も行列してまで正倉院展を見に行ったかという理由は、今の若い世代には納得しがたいかも知れません。それは正倉院御物は普通の国民には全く拝観する機会のない皇室所蔵の宝物であるとされていたからで、それが東京で公開されるとしたのは、正に千載一遇のことであったからであります。見られないとされているものほど見たがるのは人間に共通した心理ですが、それが1200余年の長い間東大寺の正倉院に伝えられた聖武天皇ゆかりの国家の珍宝と聞かされては、なんとしてでもまのあたりに自分の眼で見ておきたいと切望するのは国民として至極当然のことでありました。それが僅か20日間という短時に限られたため、連日押すな押すなの大混雑で、博物館の整理係は「皆さん、どうか立ちどまらないで下さい。押し合うと柵が倒れますからゆっくり歩いて立ちどまらないで下さい。」と終日声を張りあげて呼び続けなければならない結果になったのでした。当時博物館と地続きの東京美術学校に勤めていた私はこのような有様を毎日眺めていて、入館券の入



木面紫檀茶局(碁盤)は「正倉院御物展」に出陳された。
『正倉院宝物 北倉』(朝日新聞社刊)より

手に長時間行列している人々に同情の念を禁じませんでした。せめて20日の会期を2倍位に延長したら、なぞと考えてみましたが、仮にそれが実現したとしても、大混雑は到底避けられなかったかも知れません。

戦後の大きな文化現象の一つとして著しく注目を惹くのは国際的美術展の隆盛となったことでもあります。その多くは日本全国に百万以上の読者をもっている有力な大新聞社が外国の著名な美術館と提携し、国立乃至は公立の博物館或は美術館と共同主催の形で開催される展覧会であります。言論の自由のない共産圏は別として、百万人なぞという多数の読者を有している大新聞社は日本にだけ見られる現象ではありますが、それが朝刊と夕刊を併せもっているばかりでなく、各種の展覧会その他の公共事業を企画する事業部又は企画部をもっているのも日本の大新聞社特有のもので、外国には見られない特殊な組織であります。そのお蔭で吾々は国内にいながら海外の有名美術館所蔵の名作を見る機会

を提供される恩恵に浴しているのです。それは一般的に見れば大いに感謝すべき高度の文化活動であり、有難い社会奉仕であります。

この種の企画は今後も盛に実現されるでしょうが、私が惧れるのはこの事業が余りにも興行化する傾向のある点であります。巨大な宣伝力をもつ大新聞が朝・夕刊を通じて連日にわたって行う宣伝の記事は大観衆を惹きつけること必定であります。その結果は美術品を鑑賞するに相応しい雰囲気、条件は全く度外視されている結果となっています。現状ではその解消を望むことは不可能と考えます。

唯一の方法は国立機関が自ら進んで国際的美術の交流を実施し、他動的企画を受け容れないこととするのが最も望ましい解決法であると信じます。現に実例はいくつもあり、その場合は宣伝過剰に因る大混雑はなく、優れた美術作品をそれに相応しい条件下で鑑賞出来たことを思い出して戴きたいものです。

(終り、78・9・16)

季刊 美のたより No.44

昭和53年 10月15日

発行 大和文華館